

(阿部) 海外の放送大学、今回はアジアの様子をご紹介します。
アジアには、南の方から申しますと、インド、パキスタン、スリランカ、マレーシアあるいはタイそれに韓国、中国と、いろいろな国々に遠隔教育手段を用いた大学があります。今日はこれらのうち特にタイと韓国の2つの例を中心にご紹介を進めてまいりたいと思います。まず今日のゲストの方々をご紹介します。アジア経済研究所で開発の問題をずっと研究してこられました林武さんです。京都大学の東南アジア研究センターの教授で、長らくタイ国の研究を進めておられる石井米雄さんです。それから広島大学の大学教育研究センターにご在任で、韓国の教育問題の専門家でいらっしゃる馬越徹さんです。では一番最初に開発途上といわれておりますアジアの全般の問題とそれに関連する教育の問題について皆さんのご意見を受け賜りたいと思います。林さん、口火を切っていただけませんか。

(林) はい。どこの国でも国造りの為の人作りということに今取り組んでいるところだと思いますが、その人作りの中にもいろいろありまして、まず水準の高い専門家を沢山作らなければいけないし、中堅技術者も必要ですし、その他に教育をする為の人作り、つまり人造りのための人作りもまたしなければいけない、そんなところが問題になっていると思います。

(阿部) 石井さん。バンコックにまいりますと私はまず混んでいるという印象を持ちますんですけれども、タイ国の事情はどうでございましょうか。

(石井) まさに混んでいるわけですね。これはタイ国ばかりでなく他の途上国の場合にもあることですけれども首都にばかり人口が集中いたしまして、首都と地方との格差が非常に大きい。それが教育の面にも反映していて、教育

全体が首都に集中してしまう。従って首都にいかないといい教育が得られないというこういう問題がかなり深刻だと思いますね。

(阿部) 馬越さん、韓国というのは他のアジアの諸国とちょっと違うと思うんです。他の国がいわゆる開発途上といわれているのに対して韓国はテイク・オフしたと言われておりますが、韓国での教育ですね。あるいは韓国の現在の全体の状況ですね。雰囲気はどんなものでございましょうか。

(馬越) そうですね。国家が主導型で国民をひっぱっているという感じを私は強く受けます。アジア全体との関係で申しますと、韓国や日本はちょっと例外になるかと思えますけれども、アジアの多くの国は多民族、多言語、多宗教ですので、やはり国の統一でありますとか、社会の統合ですね、その為に言葉は悪いのですが、教育をひとつの手段として国造りの基礎として非常に重要な位置付けを行っているといえます。韓国も例外ではございませんけれども、アジアに共通する問題としてはそんなことを感じます。

(阿部) 今国造りの課題としてアジアの諸国が非常に大きな問題を抱えている、そして国造りの時に地域の格差、特に都市と地方の格差あるいは階級の格差、そしてそういうものの統一の問題というようなことが提起されました。そこに教育がどういう役割を担って来るのかということの討論に入ってまいりたいと思います。まずタイの実例から入りたいと思いますが、石井さんタイの教育問題の特徴を拾ってください。

1. タイの放送大学

(石井) タイを考える時にまず1960年以前と以後ということがひとつの分水嶺になるんじゃないかと思えます。つまり60年以降にタイが計画的に国家開発を始めたという状況がありまして、その時に国家の発展にとって必

要なのは人材であると、当時は大学は5つしかなかったわけですが、これを地方にも造るということ、それから地域的にまず拡大しそれから続いて量的に数的に拡大して行くという状況が起こったわけなんです。最初の頃は大学卒業者を全部合わせても4万にも満たなかった状態ですが、それが現在では大学の進学率も大分高まって全体でおそらく20万人に近いぐらいの在学生在という状況になって、この傾向は益々展開していくんではないかというふうに思っております。

(阿部) 伝統的な大学にチュラロンコン大学がありますが、相当学生が多いようですね。

(石井) ええかなり多いです。

(阿部) 大衆化してまいりますと、うんと多いところが出てくるわけですね。

(石井) そうですね。そのひとつの例がラーマカームヘン大学という大学なんです。これはバンコクの郊外に設けられたいわゆるオープンユニバーシティですけども、非常に大きな大学で、とても10万の学生を通常の方法では教えるのは大変じゃないかと思えますね。

(阿部) 様子を見ましても、非常に広くてビルがたくさん並んでいるわけですが。

(石井) そうですね。

(阿部) マイクがを使っているようですが、やはりマス教育でしょうか。

(石井) ええまさにマス教育で、マイクロホンが必要だというだけではなくて、ここではテレビを使っているようですね。上からテレビをぶら下がっていますね。このくらいになると、やはりテレビがないと聞こえないということで、学生は先生の顔を遠くに眺めながらテレビを見るということにな

るんでしょうか。

(阿部) テレビといいましても放送ではないんですね。

(石井) そうですね。なにしろ数が大いので、学生を教育するために校内テレビが必要だとそういうことでしょうか。

(阿部) 閉回路ですね。

(石井) そうです。

(阿部) 様子を見れば普通の大学みたいに学生同志が集まって話をしたり、勉強の仕方も日本の大学の風景とかなりよく似ておりますね。

(石井) それは確かにそうです。

(阿部) 最近ラーマカームヘン大学からお出でになった先生の話しですと、初級の英語なんていうのは、10万人に対してひとりの先生がいったんに学内テレビを通じて教育をやっているというようなことを言っておりました。専門のサブジェクトというような辺ではどうなんでしょうか。

(石井) ですから結局サブジェクトの場合ですと、これだけ大きくなるとどうしても限界が出てこざるを得ないと思います。

(阿部) 大学ヘマスを集める試みを進めたが、それが限界に来てしまったので、今度は遠隔手段を導入しなければならんということになったわけですか。

(石井) そういうふうになるとも考えられますね。

(阿部) 新しい遠隔教育大学がスコータイ・タマチラート大学で、難しい名前ですけども。

(石井) これは王様の名前ですね。ラーマ7世王の若い時の名前です、ところでバンコックの町は、真中にチャオブラヤー川が流れていて、この川の兩岸に街が展開しています。伝統的なマス大学はこの大都市の中へ造ったわけ

です。今度の新しい大学は、バンコックの東北にあたる郊外に新設されました。これには、日本政府がスタジオを寄付しました。大学本部ビルの正面には、大壁面にレリーフがあって、現在の文字と非常に違うわけですが、シンボルが出来ています。その絵がおもしろいのですが、まず兵隊さん、つぎに農民、それにお坊さんが描かれている。要するにこの大学はこういういろんな人が勉強するということです。

(阿部) この大学には工場もありまして、印刷教材に力を入れているのですが、ニユム助教授に教科書のご説明をいただきたいと思います。

(ニユム) ひとつのブロックは6単位分の1学期です。6単位分で全部で15章あります。この11～15章の中を6つに分けましたんですが、教科書と練習書を必ず一緒に使用します。学生が勉強する時は教科書から勉強する。各章ごとに、章の計画全部のアウトラインがあって、これでこの章ではどんなことを勉強するのかを頭に入れる。この章の概要、この章の目的、学生がどんなことをしなければならないかを書いてあります。練習書には、この章の内容を勉強する前に必ず知っていなければならないこと、この章の関係のことをこれまでにわかっているかどうか確認しておくための自分でやる練習課題があります。復習の部分をやって、自分がわからないことがたくさんあるか、わかってから、新しいことを勉強します。新しいことを勉強するときは、勉強する課題のひとつひとつに問題が対応しております。教科書で勉強をやる時には、練習書をあけてやります。

(阿部) そこのスタジオは、日本国政府が寄付したものです。ウイチットさんというこの学長さんのお話を承って、スコータイ・タマチラート大学の考えを伺ってみたいと思います。

※ウイット学長※

私達の資源には限りがあるために伝統的な方法で高等教育の場を拡大することが困難です。10年程前、政府は審議員会を設立し、教育の機会を広げる実践的な方法を検討しました。その結果、イギリスを初めとして幾つかの国で行なわれている遠隔教育および学習システムが、伝統型教育に代わる機会を提供し、高等教育の民主化を図る実践的手段であるということになりました。それがこの（大学の）構想の出発点となったのです。

私達は家庭で受けられる教育を主眼に、多様なメディアを併用して教育を行っています。遠隔教育に使われる基本的なメディアには、テキストや演習帳のような印刷教材、録音テープ、ラジオ講座、テレビ講座、また全国各地の学習センターで行なわれているチュートリアルなどがあります。

（そうした教育の提供にあたっては、教師の養成が非常に重要な課題とだと思われませんが、この点についてはどう対処されていますか？）

タイでは現場の教師の大半は、補助教員の資格しか持っていません。これが我国が過去10年間に非常に急速に教育の場を拡大してきた結果です。従って、短期プログラムにより教師を養成する必要があります。殆どの教師は正教員の資格を得るために教育を受けなければならないからです。私達は教師が働きながら学士号を取得できるように継続教育の一貫としおてキャリア育成のプログラムを提供しています。

私達のプログラムはキャリア育成に重点を置いており、大半の学生は既に仕事を持っている成人学習者です。また、このプログラムは発足当時から（Ministry of University Affairsや Service Commissionなどの）すべての政府の基準認定機関による認定を受けていますので、このプログラムの卒業生に対する社会的評価は順調であり、他の大学の卒業生と対等に学位取得者

として扱われています。学位の評価や受入れに関しては全く問題ありません。

(阿部) この新しい大学はいろいろな手段、すなわち印刷メディア、それに放送メディア、それからカセットからチュートリアルというようなものを使いまして、遠隔の地にいる人たちに大学教育を与える、ことに教員や官吏に大学卒業の資格をはっきり与えるものであります。先程もありましたように、ここには3つのテレビのスタジオとそれから6つのラジオのスタジオがございまして、これは全国放送、タイ国営放送を使いまして全国放送を実施しております。それからまたタイの郵便制度を使いまして、その教材は全国に届けられている。ここにこの大学の非常に大きな特徴があるように思われます。

(阿部) 石井さん、ウイチットさんのお話を土台にいたしまして、この新しい大学の特徴をエラボレートしていただけますか。

(石井) そうですね。非常に面白い統計があるんですけども、この大学の在校生のパーセンテージを年齢別にとりますと、23歳から40歳までがなんと85パーセントを占めているわけですね。それから初年度これは1980年81年ですけれども、それでどのサブジェクトが一番多いかというところ、教育が91.72パーセントと圧倒的な比率を占めているんです。それから2年度目、すなわち82年になりますと少し下がりますけれども、それでもかなりのパーセンテージが高い。その代わり教育が下がった代りに何が起こったかということ、法律が約50パーセント近くになっているということなんです。これが一体何を意味するかということ、通常の大学生ということではなくて学生はまさに官吏である、あるいはとりわけ教員ですね。初年度の

場合にはさっきウイットさんがおっしゃっていたように、教員で質を高めていくということ、しかもそれが在宅のまま大学の資格を取ることが出来るというところが非常にはっきりこの数字に出ていると思うんです。

(阿部) 林さん、このタイの問題は、非常におもしろい国の発展の人材育成という課題に対する取り組みだと思いますが、途上国全般の開発と教育という問題から御覧になりますとどうでございますか。

(林) これはなかなか賢いやり方だと思いますね。最初はあまり高いレベルでなくてもまず普及させて、その次に再教育とか高い水準にするとかということを考えている点では戦略的にも賢明なやり方だったというふうに思います。

(阿部) 石井さんのお話しにもございましたけれども、在宅でということが非常に重要になりますと、全国に広げてやっていく。しかもただ遠隔の手段だけですと時間が荒くなってしまうということになりますと、その地域に置いた学習の為のセンターというようなものが大事になると思いますが、そちらの方面の手当てについてはどうですか。

(石井) 在校生をみますと在校生の64パーセントがバンコックを中心とする中部タイ以外なんです。タイは全国が4つの地方からなるわけなんですけれども、その4つの地方、北部、それから東北部、それからバンコックを中心とする中部ですね。それからマレー半島部の南部。図1にありますように、この4つのそれぞれに2つ、全部合わせますとバンコックを含めて9つの学習センターがあると、それで遠隔のハンディキャップを補っているという点では大変この分布はよく考えられているというふうに思います。

図. 1



(阿部) もっと小さな点がございますが、あれはどういうものですか。

(石井) これは小さい学習センターで、これはまず中心があって地方の中心の更にそれを囲むように小さいセンターがあるわけですね。その分布はかなり密度が濃いように思います。

(阿部) 学習センターでの学習というのもひとつの方法ではございますけれども、学習の基本になるのは在宅学習ということになります。実際に学生がどういうやり方で学習しているのか、少しご説明をしてみたいと思います。例えば、ある学生さんの家ですが、実はこれは水道局の官舎です。ということは学生さんもお役人であるということなんですね。石井さん、役人かつ学生というのはタイでは普通ですか。

(石井) タイは女性が多いです。非常に多いと思います。お役人で女の方というのは非常に多いです。

(阿部) 教科書とカセットの組み合わせがございますね。カセットで、教科書の読み方の説明をしているわけですね。それからテレビがありますが、驚いたんですけれども、ゴールデンアワー、夕方の6時半から8時半なんです。どうしてなのでしょう。

(石井) そうですね。この時間帯は省エネルギーの立場からテレビを放映しない、ただし放送大学は別ということで、結果的に見ると、これだけのためにまさにゴールデンアワーが用意されているということになるわけで大変賢明なやり方だと思うんですけど。

(阿部) 赤ちゃんも見えますけれども、下からの生涯教育ということになりますね。こういうふうにして学習するわけですが、特徴がいくつかにまとめられるんじゃないかと思います。石井さん、こういう新しいものが入って来た時にタイの場合どんなところに特徴がありますか。

(石井) さっきのラーマカームヘン大学と比べると非常によく分るんですけども、ラーマカームヘン大学の場合には普通の学生がたくさんいるわけですね。しかもバンコックにあるということで従来のバンコック集中型のパターンを更に拡大したというかたちだったんです。従って公開大学として始まったわけですが、公開にするとそこへ人がまた集まって来るということで、中央と地方の格差は埋められないままなわけです。ところが今度の場合は完全に地方分散が実現した。しかも在宅でやることが出来る、その為のいろんな補助手段があるということでまったく発想法が違うということだと思います。60年以降、地方にも大学が出来たんですけども、その場合でもやはりチェンマイであるとか、コンケンであるとかいうふうに地方の中心だったわけですが、今度の場合にはそれが更に全国に広がったという点に特徴があると思います。しかも学生の年齢が高くてインサービストレーニングといいましょうか、そういう方に就学の機会が与えられるという点が従来とは全く違う考え方だと思います。

(阿部) 林さん、こういうふうに聞きますと非常に明るい方ばかりが目につくわけでございます。開発の問題というのを考えますと高等教育のアクセス

がこういうかたちでかなりよく改善されてきたということが言えると思うんです。しかし開発の問題というのはおそらくそれに止どまらない問題を持つんではないかと思いますが。

(林) そうですね。今までは教育は非常にお金のかかるものだったから特権的な階層しか教育を受けることができなかった。そうすると新しい開発の必要に合わせて高等教育機関ばかり広げて行きますと、ローマ字のTという字を逆様にしたような格好になってしまい、これまた不安定になるんです。そのことを裏返しでいいますと、肩書社会になってしまいます。専門家やインテリが不足だから、実力じゃなくて肩書で人間を評価するということになってしまうので、もうちょっと中間と規定の部分が増えてこないという問題はしばらく残る、その過渡期なんじゃないでしょうか。

(阿部) 今の林さんのお話し、こういうかたちでの高等教育の大衆化と共に更に初等教育、中等教育を含めての、より深い、広い根っこを作らなければいけないんじゃないかと、それがやはり開発途上国のひとつの課題ではないかというようなご指摘でございました。ところでタイというような開発途上の国よりも一歩進めた、いわゆるテイクオフの始まっております、韓国でございますね、馬越さん、最近私韓国に行きました時にとにかく活気に驚きましたんですが、今の韓国の状況をまずご説明ください。

2. 韓国の放送大学

(馬越) おっしゃる通りでして、1988年のオリンピック招待に成功したことによりまして、政府も国民も大変盛り上がっている感じを私も受けますね。このオリンピックを契機に先進国にというのがスローガンになっておりまして、いろいろな形で自由化政策というものを国が率先して行っているよ

うです。例えば、ソウルの玄関口である金浦の飛行場の税関に女性が登場するとか、あるいは学校現場で言いますと、今まで40年間ずっと続けて参りました制服ですね、黒の詰め衿とセーラー服を国の命令で廃止してしまうとか、頭髪を自由にするとか、そうした非常に盛り上がりというんでしょうか、自由化を感じます。

(阿部) 今ご指摘の解放政策は教育の方面にも相当大きなインパクトを与えておりますですか。

(馬越) そうですね。特色をいくつかあげますと、これは従来からそうだけれども、教育熱がとてもし高い、異常に高いのではないかと私は思います。それからもうひとつは国造りの基礎として国籍ある教育といいますか、韓国的価値を教育の中に植え付けて行こうというのが非常に特色になっているようです。

(阿部) 若者が大学へ行くのもいいんですけども、しかし勤労学生とか、そちらの方面が対応できないんじゃないかという問題がある。生涯教育というのは先進国諸国いずれも非常に大きな問題になっておりますが、そういう点で、韓国の放送通信大学は韓国の政策とは関係ございませんか。

(馬越) 非常に関係ございます。最初は、大学に行きたい人が非常にたくさんいるにもかかわらず大学のプレイス、つまり定員がそれに応じきれないということで、韓国流に言いますと再修生、日本流に言いますと浪人がたくさん出たわけです。その浪人を救済する手段として最初は通信制の大学を発想したわけです。ところがちょうど1970年の頃に、生涯教育という概念が登場しまして、やはり今先生のおっしゃいました勤労学生でありますとか、あるいは社会的に恵まれない人に高等教育をとということでこの通信手段による韓国放送通信大学というのが出来たわけです。最初は、2年制の大学とし

て1972年に国立のソウル大学に付設というかたちで出来ました。3年程前、1981年にこれが5年制の大学に生まれ変わりました。現在はソウル大学から独立いたしました、国立大学になっているわけです。

（阿部）新しく5年制の放送通信大学でございますけれども、韓国の放送通信大学から金昇漢先生をお呼びいたしましてお話しいただきました。本来は韓国語でお話し願うのですが、聴き手の便利のために、特に日本語でお願いします。一番最初に韓国放送大学が設置されました目的を簡単にご紹介くださいますでしょうか。

（金）ご承知のように高等教育の大衆化の趨勢と言いますか、それは韓国の場合も同じでありまして、大学生の数が急激に伸びてはいますが、一般の大学をたくさん作って学生を教育するということとはできない。それに私の大学の設立の年代、あの時分にいわゆる生涯教育という概念が唱道されて、職場にしながら誰でもいつでも勉強が出来る高等教育機関を作ろうというわけでこの大学が発足したのでございます。

（阿部）高等教育の大衆化にたいするアクセスの確保ということでございますが、今韓国の大学生の総数、それから放送大学の学生数それは大体どのくらいでございましょうか。

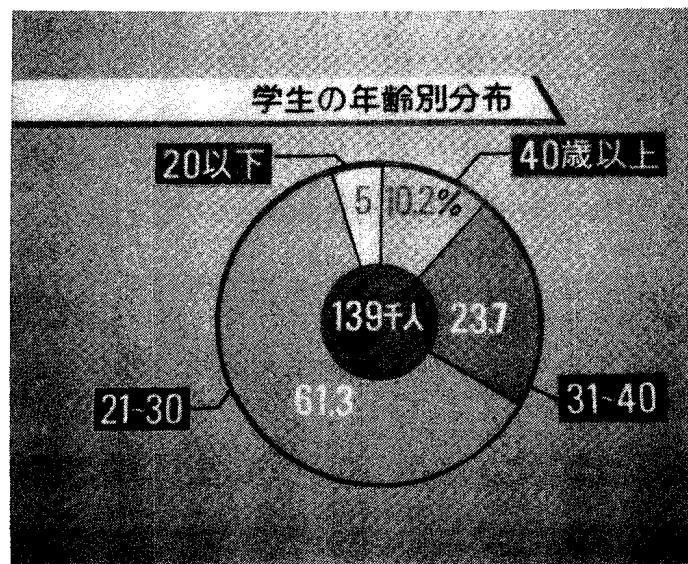
（金）まず放送通信大学の学生数は登録学生だけで今年の春14万でございました。それから一般の大学は約100万ですから、韓国の高等教育機関の学生数総数の12.3パーセントくらいを放送大学の学生が占めているわけでございます。

（阿部）そうすると放送通信大学が非常に強い大学進学希望に対してアクセスを確保するのに役立っていることがよくわかったんですが、もうひとつのねらいの継続教育という問題で申しますと、14万人の学生のうちどのく

らい若い方でどのくらいが成人でしょうか。

(金) もとより制限をしませんから、一般の高等学校を出た者が志願をしても入れるわけでございます。今韓国的高等学校卒業生の殆ど半分くらいは大学に、一般の大学に進学してますから、放送通信大学の学生数も、約26パーセントくらいは若い、つまり高等学校を卒業してすぐ入ってくる学生でございます。(図2参照) 残りの約70パーセントというのは成人の学生で、中には50何歳の老人学生もいるわけでございます。

図. 2



(阿部) そうすると継続教育という目的でございますね、要するにもう既に社会に出て更に勉強を続ける方がおられる、ただそういう方は入るのがなかなか難しいかと思えますけれども、入学方法はどんなふうにしておられますか。

(金) 入学の方法でいろんな検討しました。ご承知のようにこの放送通信大学は開かれた大学で、制限をしないのが建前でございますけれども、定員の事情や予算とか専任教員の問題で制限しないわけにはいかない。それで出来るだけ若い学生でしかも出身高校の成績が優秀な学生、それに優先権を与え

るわけでございます。それで大体1年に競争率は約3対1くらいになりますけれども、今までのところ高等学校の成績の非常にいい方の学生が入っています。

(阿部) そういう人たちですから、かなりできる人たちですが、それでどの程度ご卒業になりますか。

(金) 卒業率は33パーセントくらいになっています。それからいわゆるドロップアウト、途中で脱落する学生が約67パーセントくらいで、比較的私たちの大学は高い方じゃないかと思っています。

(阿部) 大学がソウル大学付設の短大として設立されたのしたのは何年前でございましたでしょうか。

(金) 今年で12年目になります。

(阿部) 12年前にできていて、これまでに約3割強の方が卒業されて7割くらいの方がまだ卒業していない。しかし、その人たちは今後卒業する可能性はあるのでしょうか。

(金) 在学年限は10年になっています。登録をしてまた帰ってくれば、10年の間は学生簿を保有しているわけでございますから、また卒業できると思います。けれども、事実上はどうもあやぶまれます。というのは、もう5年も6年も登録しない学生がまた6年後、7年後に登録するとはちょっと思えませんから。

(阿部) 卒業された学生さん方でございますね。そういう方々の社会による評価はどうですか。例えば大勢の方が公務員になるとか、そういう点はどうでしょうか。

(金) 大体先に申し上げたように職場をもっている学生が多いものですから、卒業してから就職がどうのこうのというのは直接言えませんが、

大体社会の受けはいいんでございます。それから私が去年アンケート調査しましたんですけれども、職場の、会社の社長とか、官公庁の長官とか、そういう人たちの評価は私たちの学生に対して非常に高いのでございます。

（阿部）確か先生の大学はもともと2年制で出発されて今度5年制にされたとうかがいましたが。

（金）1981年から5年制学士課程の大学に変わりました。ですから来年始めて学士号を得た正規の大学の卒業生が出るわけでございます。これまでは短期大学相当の卒業生を10回出したわけでございます。

（阿部）教育方法についてうかがいたいんですが、先生のところは主体とするメディアは印刷物、スクーリング、その他どういうものがございしますか。

（金）放送通信大学といっていますから、主に放送があるわけでございますけれども、今のところFMのラジオだけでございます。今スタジオを建設してVTRでテレビの授業をやろうと準備中でございます。

（阿部）そういたしますと、今までのところはラジオで学習し、それから本で学習し、それからスクーリングに行かれる。スクーリングは義務ですか。

（金）スクーリングに出ないと試験を受けられない。義務というよりも必ず出なければ正式の学位の取得につながらないわけでございます。

（阿部）全ての科目についてスクーリングがあるわけですか。

（金）全ての科目ではございません。というのは初めは全ての科目に対してやるつもりだったんですけれども、学生数が非常に多くなって、スクーリングをやる場所があまりありませんから、今は一部の学科はスクーリングを免除するというようにしております。

（阿部）金先生、この教材等は非常に充実しておるようでございますが、これは何でございしますか。

(金) 例えば、「家庭経済学」ですね。これには、教科書とそれに合ったカセットのテープがあるわけでございます。講義の全科目が10本のテープに収まっているわけでございます。

(阿部) 学生はどういうふうに入手するんですか。

(金) 学生には非常に廉価で、製作実費ですね。ですから日本のお金だと1500円くらいでこの10個のテープが販売されているわけでございます。

(阿部) 学生は授業料の他に教科あたり1500円払えばラジオを聞きのがしてもテープで学習出来る。まだありますか。

(金) まだあります。主に教科書で自学自習をしてそれからラジオの放送を聞いてそれを補うことでございますけれど、初めにここにありますように講義要目というものを各学年別に学生に与えるわけでございます。それでどういうふうに勉強するかということがわかります。

(阿部) これをどう勉強するかがこれにあるわけですね。スタディ・ガイドということですか。

(金) そうそうスタディ・ガイドでございます。それからここに「放送通信大学学報」という大学の新聞がございますけれども、これが毎週発行されてこの本に書いてある以外に教授が補充の論文を書いたり、指導のスタディ・ガイドをここに書いたりするのでございます。それで学生はこれを受け取ってまた参考にするわけでございます。

(阿部) 学習のペースはこれで決まる。学生新聞でペースが決まって自学自習は教科書とラジオ又はカセットとスタディ・ガイドでおやりになる。

金さんのお話し大変よくまとまっております、しかも日本語、明確な日本語でお話しくださいましたのでよくお分りだったと思います。馬越さんこの金さんのお話しをもとに特徴を更に掘り下げていただきますとどんなこと

になりますでしょうか。

(馬越) そうですね。ほぼついていると思いますけれども、若干統計数字で補足をさせていただきますでしょうか。

図. 3

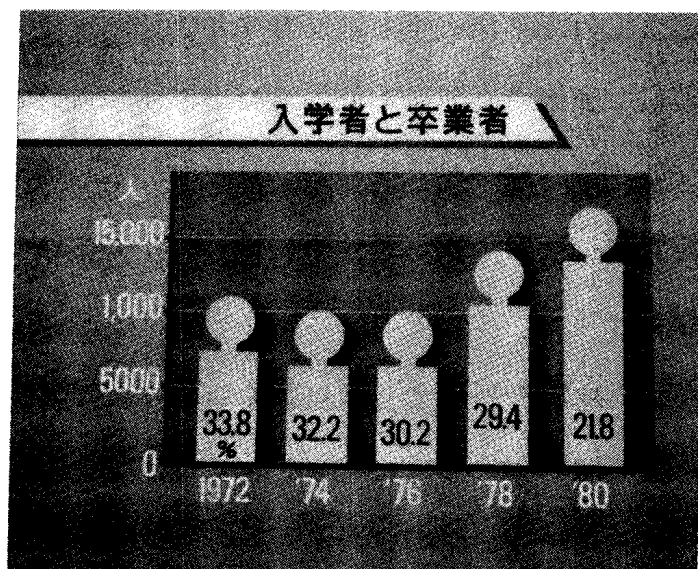


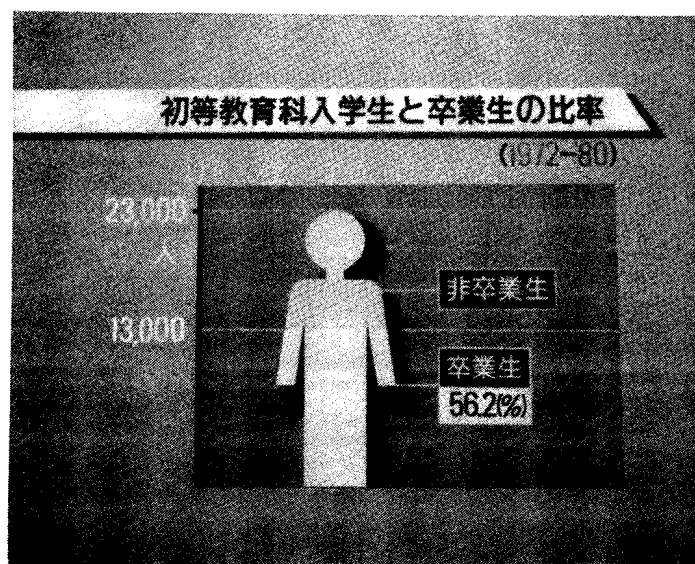
図3は、入学者と卒業者の時系列の統計ですがけれども、創設以来入学者はどんどん増えておりまして、紛れもなく韓国最大の大学に成長しているわけです。ところが卒業率を見てみますと、最初は33.8パーセントでしたけれども、最近は21.8パーセントに下がっている。これをどう見るかというのは大変難しいんですけれども、やはり教育水準の管理をかなり厳しくやっているというふうに見ていいのではないのでしょうか。国際比較的に見ると、この数字が必ずしも低いとは言えないと思いますけれども、韓国ではかなり厳しい教育水準の管理をした結果がこういうふうになっているんじゃないかと思います。

(阿部) だから逆に卒業すれば社会によく受入れられるということになるんでしょうね。

(馬越) 卒業生はそうですね。それから初等教育科というのがございますけ

れども、この卒業率は、図4にありますように、56.2パーセントで非常に高いわけです。これは現職の初等中等学校の先生方が資格を向上させる為にやって来ているわけで、先生方が非常に熱心に学習した結果というふうに読めるのではないのでしょうか。

図. 4



(阿部) 給与面なんかも改善されるんですか。

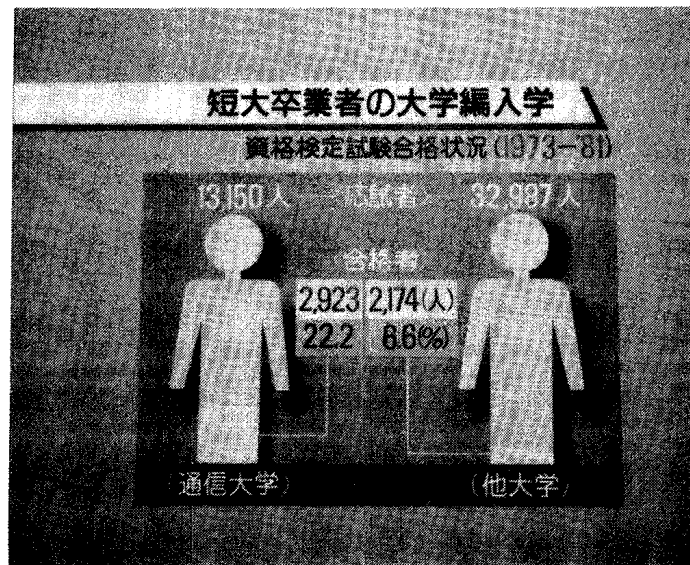
(馬越) それは資格がアップいたしますと、俸給のスケールがだんだん上ってまいりますので、それだけメリットがあるわけです。

(阿部) 現実にそういうことがございますんですね。

(馬越) そうですね。それからもうひとつ、この大学は先程も申しましたように、2年制のいわば短期大学という形で出発いたしましたので、4年制大学への編入、トランスファーですね、これが大変重要な問題でございます。図5にありますように、通信大学の卒業生が4年制大学への編入試験を受けた合格率は22.2パーセントと非常に高いんです。それ以外の大学つまり専門大学(短期大学)から受けた人たちの合格率は6.6パーセントですから、通信制大学の教育水準が非常に高く保たれていることの現れではないか

と思います

図. 5



(阿部) もうひとつの課題といたしまして、こういうところで間口を広げる、間口を広げるという時にはいろんな意味での可能性という問題があるわけですが、それには経済的な負担の問題があるんじゃないかと思いますが。

(馬越) そうですね。大変重要な問題でして、これは現在5年制の国立大学ですけども、一般の国立大学の授業料の10分の1程度なんです。ですから、非常にアクセスしやすい高等教育機関になっているということが言えると思います。

(阿部) それからもうひとつは、先ほどタイでも、発足当初は教員養成、それからその次に公務員の資質向上というようなところに現実のニーズが非常に強かったというお話がございました。韓国の場合従来の2年制から5年制大学に変わると同時に、科目の面でもニーズに応じて相当変化しておりますんでしょか。

(馬越) そうですね、韓国では、受講者の御三家というのがありまして、ひとつは教員、ひとつは公務員、ひとつは会社員ですね。科目及び学科の方の

変化ですけれども、やはり教員を中心に語学関係の英語でありますとか中国語、フランス語のような科目が増えています。それからこれも教員養成と関係しますけれども、幼児教育学科ですとか、あるいはこれは教員それから会社員、公務員総てに共通いたしますけれどもコンピューター科とかの新しい学科の誕生があります。社会のニーズを先取りしたようなかたちで新しい学科を作っているようです。

（阿部）科目のそういう広げ方から言いますと、この韓国の放送通信大学というのは継続教育ニーズに対する対応として非常に強いものを持っていると思いますですね。コンピューターというようなハイテクノロジー社会の到来への準備というものへ新しくのびている。そうすると、もう一方の方の継続性というのは、若い方の人々を新しいハイテクノロジー社会にどう対応させるかという問題があるかと思いますが、そういう点では韓国はどうなんでしょうか。

（馬越）そうですね。この放送通信大学におけるコンピューター教育というのは始まったばかりでございますけれども、今おっしゃいます点と関連して言えばやはり初等中等教育の中でのコンピューター教育ですね、これはやはり数年前から韓国の政府が非常に力を入れておりまして、ある意味では日本よりも進んでいるのではないかと思われる程コンピューター教育には小学校中学校のレベルで力を入れているようです。

3. これからの課題

（阿部）こういうふうな非常にいろいろな特徴を持ったかたちでたったふたつの国、タイと韓国だけを比べましても固有のニーズに対応しておりまして、遠隔教育というものが同じようなものだと言簡単にはできないよ

うな感じがいたします。今私たちが日本で放送大学の開学を目前にいたしまして、問題を考えるにいたしましても、また別の問題があるんじゃないかと思います。ひと昔前はアジアと言えば後進性というような言葉で言われておりました。その後進的なアジアを発展途上国とか開発途上国とか呼び、開発していかなければいけないという前提で、開発と教育とは何かというのが共通の課題だというふうに言われておりました。どうもそう一言では言えない状況に来ているようでございますね。やはりそれぞれの国、それぞれのニーズに対応して、しかしその共通の方法、従来の伝統型の高等教育で満たされない部分をどう対応していくかというような課題が出ているんじゃないかと思います。そういうふうに考えてみますと、伝統型の高等教育が既に強いニーズによって支えられている韓国で、この新しいかたちの高等教育機関が出て来た時に、これがどうシステムの中へ統合化されていくかということが非常に大きな問題だと思いますけれども、馬越さんその辺はどうでございましょう。

(馬越) そうですね、やはり一番大きな問題はこの大学の卒業生が社会にどのように受入れられるかという問題だろうと思います。韓国は従来から教育と言えば学校教育という伝統があるわけですし。この放送通信大学も確かに学校教育なんですけれども、しかしいろいろな面で生涯にわたって教育機会を保証するというような意味で新しい考え方なんです。そうした意味でこの大学の出現によって「生涯学習人」というような新しいカテゴリー、つまり生涯学習をする人が韓国に初めて生まれたというような意味で大変評価が高いようでございます。特に全斗煥政権が発足しましてから、憲法のエデュケーション条項に、生涯教育規定が盛り込まれました。つまり、「国家は生涯教育を振興しなければならない」というような字句が憲法に入ったこともございまし

て、この放送通信大学は国民からも非常に期待されているというのが現状でございます。

（阿部）林さん、今の韓国が発展途上国の中に位置付けられるのが適当なのか、あるいは別のカテゴリーに入れるのが適当なのかその辺は問題があるかと存じますけれども、開発途上国の課題ということを考えた時に、高等教育の位置、それからまたそういう非伝統型高等教育の位置と、それからそのそういうものを外からとりまく発展と教育の問題ということでお取りまとめいただけないでしょうか。

（林）はい、韓国やタイは、いわば成功しなければおかしいくらいの背景を持った例だと思うんですね。他の面から言いますと、政府のニーズとか行政のニーズに従った国造りに放送とかあるいは学校とかというのが動員されてしまいますと、地方ごとの特殊性とか民族ごとの特殊性が、失われたり、場合によっては言葉と文化を奪われるという危険があって、それはいわば開発の悪、中央による地方の征服みたいなことになってしまう。それがかえって国民的な発達全体にはむしろ好ましくない。しかし、さしあたりはそういう国民統合とか社会統合という一定の方向がないと次の段階に行けません。そういう意味で過渡期にあるんじゃないかというふうに思うんですが。

（阿部）石井さん、今非常に難しい問題があることのご指摘がありました。特にローカルなニーズの問題と、国造りという時に、国からひっぱっていかなければならない問題というのがあるということかと思います。特にタイのように、現時点において他のアジア諸国より進学率がやや低いといっても教育ニーズというのはものすごく高いわけですね。そういう状況の中からタイをもういっぺん見直していただくとすると、この遠隔教育手段の採用ということのインパクトは特にどのへんにございますでしょうか。

(石井) 遠隔教育について、ウイチットさんが言っていることが3点あるんです。第1点は生涯教育、これは韓国でも出て来たんですね、第2点は教育機会の拡大、これはフィリピンなんかでもよくデモクラタイゼーション、高等教育の民主化といわれている。3番目には在宅学習という、この3本だと思うんですね。この柱は将来どういうふうに伸びて行くかはわかりませんが、とにかく今時代が、大変な速度で変わりつつあるという状況があるわけです。従ってこの遠隔教育の場合でも、それぞれの発展の段階、それぞれの歴史的な背景で評価しなければいけないと思います。さっきの例でもありますように、80年度では教育の方を専攻した人が91パーセントもいたのに、その次が今度は法律が50パーセントになったという状況がそれをはっきり表しているわけで、将来ともこういうトレンドがのびていくとは限らないわけで、それぞれのニーズに従った遠隔教育の在り方が出て来るんじゃないかと思うんです。従ってもう少し長いタイムスパンで考えていかないと評価できないんじゃないかと思いますが、にもかかわらず、やはり伝統的な教育を一步乗り越えて教育機会を均等に拡大するということは大変な革命に結びつきうるんじゃないかと思います。ですからやはりどの歴史の発展段階で捉えるかということじゃないでしょうか。

(阿部) タイとか、あるいは韓国と比べまして、日本はテクノロジーの面の現代化、あるいは近代化というのは一步進んでいる社会を背景にしているわけです。現在そこに放送大学が始まろうとしておりますが、一面これは学問の機会を、第2の学習機会を与えようではないかという運動というふうに考えますが、しかし、韓国の実例、あるいはタイの実例、それからその他のいろいろなところのことを考えてみますと、どうもそれだけでは終わりそうもないような感じがいたします。例えば教育のインテグレーションというこ

とを考えると、遠隔手段の学習と伝統型大学での学習とのトランスファアラビリティという問題がおそらくあるんだと思います。例えば韓国の場合にもういっぺん戻って、馬越さんのご意見を承りたいんですが、究極的に両者はイコールになりうるのか、なりえないのか、あるいはまた究極的にはイコールになる必要がないのかどうかというような点はのでしょうか。

（馬越）まず、この放送通信大学は既存の大学に対するインパクトというものがあると思うんです。新しいメディアを使った教育、それが既存の大学にどのような影響を与えるかという放送通信大学の側からのインパクトと、それからもうひとつはやはり既存の大学がこうした通信制の大学にどのように協力していくかという問題があると思います。後者について言いますと先程のトランスファーの問題に関連いたしますけれども、当初この大学はソウル大学に付設されたにもかかわらず、その卒業生をソウル大学は一人も受入れてこなかったという問題があるわけです。やはり既存の大学がこうした新しいかたちの大学を育てていくというが、どうしても必要になってくるのではないかと思います。

（阿部）我国で申しますと東京大学や京都大学が、放送大学といかにトランスファアラビリティを確立するか、これは今後の課題であろうかと思えます。もうひとつ、石井さん、リサーチユニバーシティの中でもリサーチオリエンテーションの強い所においでになるわけですが、もうひとつの問題は遠隔手段を使った教育の場合、新しい学問の発展への共感をどう展開をどうするか、端的に申しますと研究をどうしていくかという問題が非常に大きいんだと思うんです。ご体験の深い京都大学と、チュラロンコン大学とそれからスコタイ・タマチラート大学というよう大学を横並びに御覧になって、研究の問題はどういうふうにお考えになりますか。

(石井) やはり、日本の場合には研究の側の教育に対するフィードバック、それから教育の側の研究に対するフィードバックということが非常に大事ですね。従来はそれが必ずしもうまくいっていない状況が現実にはあると思うんですが、こういう新しいスタイルの高等教育が出来ると、もういっぺん新しい可能性を探るいい機会ではないかと私は思います。どうなるかちょっとわからないんですけども大変大事な機会ではないかと思えますね。

(阿部) 研究機関と教育機関というのが途上国の場合にしばしば、機能分化してしまう例が一部にございます。それからもうひとつは、大学以外に研究機能がないので、本来の大学教育の義務を放擲してもっぱら他の機能に大学教授が働く、こういう状況がもうひとつの途上国の大学問題かと思えますが、その辺はどうですか。林さん。

(林) そうですね。しかもその時に、特定の大学と特定の人に集中するという問題があります。この問題は実はそういう人が持っている国際性とかかわるんです。ですから国民教育の仕方と大学建設が、同時に今度は国民主義的・排他的になってしまいやすいし、そうするとまた問題が出てくるんですね。ですから国際性をどうとりこむかということが僕は次の課題だと思うんです。

(阿部) 今日はアジア、私共の身近な国々でございますアジアの諸国の遠隔手段を用いた高等教育を、特にタイと韓国を例にとりまして話し合っていました。もともと途上国の緊急の課題としては、高等教育へのアクセスの拡大ということから始まりながら、実際の運用の中から、それが生涯教育の課題としてより大きく、より広い意味を持つようになってきているようでございます。私共はこれら外の経験から、外の経験を見ながら、日本での私たちの仕事に何等かの示唆を得ることができるのではないかと思うのでござい

ます。今日はどうもありがとうございました。